

令和2年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	34	学校名	静岡高等学校	校長名	志村 剛和
------	----	-----	--------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
ア	毎日の学習及び生活のリズムを確立する	○「規則正しい生活をしている」と自己評価する生徒70%以上 ○あいさつができると自己評価する生徒80%以上	○全体65% 1年64% 2年66% 3年65% ○全体83% 1年84% 2年81% 3年83%	B	○「規則正しい生活をしている」と自己評価した生徒は65%と昨年の62%より増加したが、目標の70%には届かなかった。 ○「あいさつができる」と自己評価する生徒の割合は目標を超えたが、まだ改善の余地がある。
イ	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を推進し、知的好奇心を喚起する	○授業を大切にしている生徒、主体的に学ぶ生徒の育成 ○「授業の内容がよくわかる」と自己評価する生徒80%以上 ○測定ツール(※)で把握した学力に基づき授業改善に取り組む教員90%以上	○全体83% 1年86% 2年77% 3年86% ○全体79% 1年77% 2年80% 3年79% ○測定ツールにより授業改善に取り組んだ教員100%	A	○「授業を大切にしている」「授業の内容がよくわかる」と自己評価した生徒の割合は概ね目標を超えることができた。「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について一定の効果が出ていると考える。 ○「静高模試」及び「学力テスト」については分析を行い、その結果が全職員にフィードバックされ、授業改善に活用された。
ウ	低学年からの高い志の育成に努め、進路実現を図る	○進路行事实施後の進路意識の向上 ○第1志望（3年次当初）の大学に出願する生徒の割合70%	○全体78% 1年75% 2年78% 3年85% ○第1志望大学に出願した生徒62%だった。	A	○新型コロナウイルス感染拡大の状況下においても、進路意識を高める各種行事が行われ、昨年並みの進路意識の向上が見られた。 ○上位層を中心に志望大学への合格実績向上が見られた。
エ	学校行事や部活動に主体的に参加し活動するとともに社会に貢献する	○学校行事、部活動に積極的に取り組む生徒90%以上 ○1部活1社会貢献活動貢献活動	○行事85% 1年85% 2年82% 3年88% ○部活87% 1年87% 2年86% 3年87% ○現時点では貢献活動未確定	B	○新型コロナウイルス感染症対策のため、仮装、修学旅行、部活動の各種大会の中止や実施形態の変更などが行われ、学校行事に積極的に取り組む生徒の割合は昨年の90%より低下したが、部活動については昨年並みの水準が維持された。 ○部活動による社会貢献活動は昨年より少なくなると見込まれている。

様式第3号

オ	読書習慣の定着と読書量の増大、図書館利用の推進を図る	○朝の読書週間 年2回実施 ○図書館開放 年 250日以上	○朝の読書週間は1学期分が中止され、1回のみ実施。 ○図書館開放は243日となる見込み。	B	○朝の読書週間は1回のみの実施となったが、1・2年生においてはLHRの中で読書会を実施し、読書に親しむ機会の確保を行った。 ○4月、5月の臨時休校の期間は図書館の開放を行わなかったため、当初目標の250日以上への開放には届かなかった。
カ	生徒及び職員が心身ともに健康で過ごすことができる校内環境を整備する	○学期1回以上の校内情報交換会 ○健康観察を通じた情報共有 ○学習環境の美化に努める生徒の育成、学期に1回の安全点検	○相談室連絡会議を月1回実施した。 ○健康観察表による毎日の健康観察の実施。 ○全体70% 1年67% 2年67% 3年75% ○安全点検の確実な実施ができた。	A	○月1回の相談室連絡会議の開催、週1回のスクールカウンセラーの来校等を通じて生徒の情報共有を行った。また、ケース会議を適宜行うことで時機を逃さない迅速な対応ができた。 ○健康観察の結果は毎日集約され、管理職を含む関係者に回覧された。 ○ごみの処理方法の不徹底については今後なくしていくための指導を行いたい。安全点検については、本校を会場とする試験（教員採用試験、大学入学共通テスト等）前に行う点検と重複しないような工夫が必要である。
キ	職員の校内外の研修を充実させる	○「育てたい資質・能力」を意識した授業改善に向けた研修機会の充実	○授業力向上研修の年2回実施。 ○カリキュラムアドバイザーによる研修の年10回実施。他校開催のAL研修への参加 ○ケースメソッド研修会の開催。	A	○授業見学とベテラン教員によるミニ講義が好評だったので継続していきたい。 ○「総合的な探究の時間」については学問と進路のつながりを考える時間となった。目標や内容についての共通理解を更に進めるとともに、生徒の取組に対する評価について研究を進めたい。 ○具体的な手法について学べ、講義内容は良かったが実施時期については検討が必要である。
ク	新学習指導要領に対応した教育課程の編成の実施及び土曜オープンスクールの充実を図る	○「カリキュラム・マネジメント」の視点からの教育課程の編成 ○中学生及び保護者等の土曜オープンスクールへの参加者数のべ1000人以上	○新課程に基づく教育課程表を編成できた。 ○4回実施、延べ1,358人	A	○新課程の趣旨を反映した教育課程を編成することができた。教科「情報」をはじめ、今後の動向については注意深く見守っていく必要がある。 ○新型コロナウイルス感染症対策のため1学期の実施ができず、2学期以降に土曜オープンスクールを4回実施することになったが、募集方法の改善や広報活動により昨年並みの参加状況となった。

様式第3号

ケ	<p>校内外のプログラムの活用を通し、グローバルな視野の育成及び国際交流を推進する。</p>	<p>○参加生徒、教職員の視野の拡大 ○各種プログラム参加者の増加と意識の向上</p>	<p>○エンパワメントプログラム、PDAディベート大会、WWLポスターセッションの実施。</p>	A	<p>○新型コロナウイルス感染症の対策のため、各種海外研修、台湾修学旅行が中止となる中、エンパワメントプログラム、PDAディベート大会（ZOOM開催）、WWLポスターセッション（ZOOM開催）等実施されるプログラムもあり、参加した生徒については視野が大きく広がった。来年度は状況の許す限り、更なる参加を促したい。</p>
コ	<p>「学校における働き方改革」に組織的に取り組む</p>	<p>○月80時間を超える時間外勤務教職員の前年比15%減 ○教育活動の検証、業務改善等、組織的改善の推進</p>	<p>○月80時間の時間外勤務教職員は教員は昨年の96人から88人と8.3%減であった。 ○校内組織の整理統合等の検討。</p>	B	<p>○定時退勤日、最終退庁時間を設定するなどした結果、月80時間を超えて時間外勤務する職員の減少が見られたが、部活動顧問を中心に長時間勤務する職員は毎月一定数存在している。 ○来年度に向け、分掌・委員会の整理統合、ICTを活用した業務改善等の検討を開始した。</p>

※「高校生のための学びの基礎診断」の測定ツール：本校においては「静高模試」及び「学力テスト」